
木乃伊

小説の鉄人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

木乃伊

【Zコード】

Z2386E

【作者名】

小説の鉄人

【あらすじ】

その1では主人公木下の勤務先の役所の実態を中心に描いたが、その2では妻香織との倦怠期に入つたともいえる私生活にスポットを当てている。

鍵を開けてドアを開けた。

最近は無言で帰ることが多くなつた。

「あら帰つたの？」飯はそこに置いてあるから

サランラップで包まれた夕食がならんであつた。最近妻・香織と一緒に夕食を摂ることはほ

とんどない。彼女もまた働いているため夕食の時間にいないうこともしばしばである。

「今日は早かつたんだなあ

「でももつすぐお得意さんと夕食会があるから出て行かないと・・・

「帰りは遅いのか？」

「たぶん・・先に寝ていいわ」

大学の同級生だった香織とは大学2年生から付き合つていて。同じ授業を受けていた香織に

一目惚れした。それまで女の子と殆ど話したこともない初な木下が勇気を振り絞つてアタックした。木下は3年生に高卒生対象の公務員試験に合格し、学生と社会人を兼ねることになった。香織は短期学部を卒業後、デザイン関係の仕事に就いた。数年後同僚の渡辺とともに独立し、最近ようやく仕事も軌道に乗り始めた。結婚してまだ2年だが家庭よりも夫よりも仕事が恋人という状態である。子作りする気にもならない。専業主婦になることを望んだ木下とは大きな溝が出来ていた。

「あんたはええよねえ・・樂な仕事で」

「君が思つてるほど樂なことばつかじやないよ

「私なんか毎日どんなにしんどい思いして働いてるか・・・

「だったら辞めればいいのに・・俺の給料じややつていけないってか」

「私は今の仕事をするのが子供の頃からの夢やつてんよ！結婚して、

家庭に閉じこめられて

その夢を壊したくないの」

最近はこんなに感情をぶつけ合つことも無くなっていた。香織も平靜を取り戻すと、鞄を肩に

提げてまた家を出た。昔はこんなに気の強い女ではなかつた。田舎から出てきた木下は「大阪にはこんなにかわいい女の子が居るのか」と思つた。香織も大人しくて気だての良い女子

大生だつた。働くことによつて価値観の違いが浮き彫りになつたが、お互に寂しさに耐え

きれず結婚すると言つ結論に至つた。木下は今日も一人でナイトーを見ながらビールを引っかける。

辞 令

木下東一殿 下水道課への異動を命ぜる」

4月になると恒例行事ではあるが、まさか自分に廻つてくるとは夢にも思わなかつた。公

務員にとつては人事異動など日常茶飯事ではあるが、もう数年はこの部署で働くことになると

腹を括つていた。あまりに急だつたので、何の準備もできていない。荷物も机に散らばつたま

まである。木下にとつて初めての人事異動ではあるが、全く新鮮な気持ちは無かつた。どこに

行つてもやることは一緒であると冷めていた。他の産業振興課の連中はそのまま留任であつた

が、木下が抜けることに何も寂しさも喪失感もない。

「はじめまして！木下と申します！よろしくお願ひします

一応威勢よく挨拶をした。

「ああ・・よろしく! 部長やつてゐる吉田やーみんなも仲良うしつてくれよ

「はいよ

「にも前の部署と変わらない無愛想な連中の集まりだ。

「とりあえず・・松下! 最初はこの子に仕事教えたつてくれや「奥の方から体格のいい40過ぎぐらこの男がのそつと歩み寄つて來た。

「係長の松下やーよろしく」

本人は普通にしているつもりであるつが、何せ身長も180センチ以上あるため必要以上に

威圧感を感じる。おまけにがらがら声である。他の職員は我関せずという感じで雑誌を読んだりパソコンをいじつたりしている。しかし、時折こっちの方を怖いもの見たさの様にちらつと伺う。きっと他の職員も松下には腫れ物に触るかのような接し方をしているのだろう。木下はしばらくする事もなく見学に來た人のように入りしく座つていた。すると

「何やこの書類は! 誰やこれ書いたんわ」

静かな室内に急に罵声が響いた。このがらがら声の主は松下しかいなかつた。

「はい・・僕ですけど」

犯人は30前半の若手職員の藤本だった。

「こんな文章で上から承認出るわけないやろ! 考えて仕事せいや! ボケ!」

木下は背筋が凍る様であつたが、藤本は表情一つ変えずに応対していた。松下の雷に慣れ

てゐるのか、よつほど藤本の性格が”ぬかに釘”なのか・・前の部署ではあまり怒られた

ことが無かつた。だからこそ血相を変えて怒る松下が天然記念物の様にさえ写つた。

「木下君！ そろそろ行こ」か？

「はい・・どちらへ？」

「現場に決まつとるやないか」

この男はものの言い方というのを知らないようだ。しかし、大阪に来てそんな人間を嫌とい

う程見てきたせいか今更大した驚きはない。

「産業振興課はしようもない連中ばつかやろ？俺も数年前おつてなあ」

現場に行くまで散々愚痴をこぼしていた。木下はただ相槌を打つしか無かつた。

「でもなあこの職場はええわ・・みんな俺の言ひつこと聞きよるしお前も俺に逆らつたら

えらい目に合わしたるからなあ！ 覚悟しとけよ！」

そういつて肩を叩いた。見た目の通り腕つ節が強いのか、もの凄く痛かつた。

「そろいえば・・自分、大人しいしあんま大阪の人間つて感じがせえへんなあ」

「ええ。石川の出身です」

「ほう・・遠いとこから来とんねんなあ」

大阪人はなぜか近畿地方以外から来た人間を見下す風潮がある。大阪が一番であるという

自尊心が強いせいなのか？ 大阪以外は外国と思つてゐるらしい。

よく見かける住宅街だった。異動したからと言つてもあまり行動範囲は変わらない。

しかし、この景色は見覚えがない。結構耐震性に優れていそうで、今時というのか家の壁

も赤褐色や青空色の物が多かつた。一世帯住宅も結構多い。どうやら、最近開発された新

興住宅地である。松下は突然マンホールの前で立ち止った。

「上からよう見とけよ」

マンホールを開けると、木下が持っていたアルミニ製の梯子を雑に降ろした。慣れた手つき

でするすると降りていった。ポケットに入っていたデジカメで写真を撮つたり何か見慣

れない器械で汚水を調査している。

10分程度すると地上に上がってきた。

「まあ・・見ていく内に覚えるやう」

随分アバウトな仕事の教え方であるが、この男は仕事は見て覚えるものという信念があるのであろう。

「とりあえずこの辺の仕事してる業者さんのとこ行くぞ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2386e/>

木乃伊

2010年10月28日08時52分発行